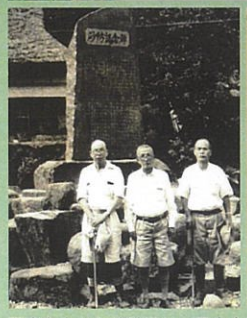
赤木正雄展示館のある赤木家住宅（有形登録文化財）

砂防の父 赤木正雄展示館のご案内

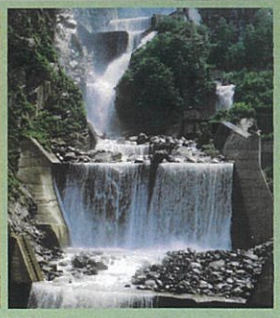
日本砂防の父　赤木正雄の功績を後世に伝える

土砂災害をなくすことに生涯を捧げ、「砂防一路」の道を歩んだ「日本砂防の父」赤木正雄の偉大な功績を後世に伝え、砂防の役割を広く知ってもらうために設立された資料館です。



日本国天皇は勲二等赤木正雄に
文化勲章を授与する
昭和四十六年十月三日皇居において
親授をおこなう

昭和四十六年十月三日
内閣総理大臣 佐藤栄作
総理府賞勲局長 吉原一真
第一五三号



写真左上から時計回り　■赤木家住宅外観　■展示館前に移設した舟　■昭和初期、水没する豊岡市
■赤木正雄の計画で造られた白岩砂防堰堤（国重要文化財）　■文化勲章授与　■雲原村で石碑の前に立つ赤木正雄

赤木正雄とは

■明治20年兵庫県豊岡市に生まれた赤木正雄は、故郷を流れる円山川の洪水氾濫をなんども経験しました。のちに第一高等学校で新渡戸稲造校長の訓示を聞いて、災害をなくし人々が安心して暮らせるようにすることに自分の生涯を捧げようと決意します。
東京帝国大学農学部で砂防を学び、内務省などで土砂災害をなくすために精魂を傾け、「砂防一路」の道を歩みました。
政治家としても活躍し、日本における砂防の重要性をいち早く説いた人物として「砂防の父」と慕われています。
昭和46年に砂防への偉大な功績を評価されて文化勲章が授与されました。

赤木正雄展示館は事前予約制です。観覧をご希望の方は当館までお申込み下さい。

砂防の父 赤木正雄展示館　（観覧は要予約です）

〒668-0843 兵庫県豊岡市引野972
◉開館時間：［予約制］週2日、金・土曜日 午前10時～午後3時まで（入場無料）
◉アクセス：JR山陰線 江原駅から車で約15分、豊岡駅から車で約15分
◉主な展示：ケース展示、パネル展示、映像コーナー

観覧申込み・お問い合せ

一般社団法人 砂防の父 赤木正雄展示館
◉電話／FAX：0796-34-6517
◉電子メール：sabo-am-tenjikan@lilac.plala-mail.jp

《赤木正雄展示館は生家である赤木家住宅の一角に開設されています。》

●発行／豊岡市 ●編集／政策調整部秘書広報課
☎0796-23-1111 FAX23-1124
市長室FAX24-1004
〒668-8666
兵庫県豊岡市中央町2番4号
URL http://www.city.toyooka.lg.jp
（総合支所）
・城崎☎32-0001
・竹野☎47-1111・日高☎42-1111
・出石☎52-3111・但東☎54-1000

豊岡偉人伝 6

私たちの暮らしの発展に尽くし、近代日本の礎を築いた人、スポーツ・芸術の普及発展に心血を注いだ人など、豊岡にはさまざまな先人たちの心が息づいています。
その先人たちに学び、志を引き継ぎましょう。

《問合せ》文化振興課☎23-1160

世界に「SABO」という言葉を広めた砂防の父　赤木正雄

赤木正雄（1887～1972）

引野出身　農学博士・政治家
1971年　文化勲章受章

▲文化勲章受章時の写真

代々、引野の大庄屋の家に４男２女の末っ子として生まれました。父甚太夫は公共事業に熱心で、蓼川（円山川）堰水路の改修や中郷区護岸工事などの責任者を務めていました。また1906年の大洪水で決壊した堤防を修理するために、私財を投げ打って工事を完成させるほどでした。

生家は円山川沿いにあるため、氾濫するたびに家も田も甚大な被害を被っていました。軒につるされた舟は、その難から逃れるためと、付近の住民に炊き出しを運搬するために使用されていました。

▲軒につるされた舟

▲洪水から守るため、高い石垣で囲まれた生家（国登録文化財）

この幼少期の記憶が、その後の人生を大きく左右させます。豊岡中学校から第一高等学校（東京大学の前身）に進み、当時校長であった新渡戸稲造と出会います。新渡戸校長は、関東豪雨の被害を受けた直後の始業式で、全校生徒を前に「治水のことは決して華やかな仕事ではない。しかし、人生表に立つばかりが最善ではない。ここに集まった諸君のうち一人でも一生を治水にささげ、災害の防止を志す者はないか」と訓示しました。その言葉に感銘を受けた赤木氏は、この時から治水の道を歩む決意を新たにしたのでした。

●砂防への熱き想い

東京帝国大学（現東京大学）を卒業後、すぐに内務省に入り、滋賀県瀬田川支流を手始めに吉野川・淀川・立山山系・飛騨山系・六甲山系など、全国にわたり自ら主任として砂防工事を指揮しました。

36歳の時、日本の砂防に限界を感じた赤木氏は、内務省を休職して自費でオーストリア・ウィーン農科大学に留学しました。２年間の研鑽を積んで帰国してからは、内務省で近代砂防技術を習得したただ一人の技師として手腕を振るいます。

1942年に55歳で退官するまで、全国各地の現場に赴き、砂防工事の指導に当たりました。また、京都帝国大学（現京都大学）や日本大学などで講義を行い、砂防理論を確立させていきます。

●砂防から世界共通語「SABO」に

退官後、貴族院議員、次いで参議院議員となって建設政務次官などを歴任し、戦後、GHQ（※注）に砂防の必要性を認めさせました。

1951年に来日したアメリカ最高技術委員会会長ローダミルクの提案により、同年、ベルギーのブリュッセルで開催された国際水文科学学会で、渓流等の浸食をコントロールすることを「SABO」とすることが認められました。

◀円山川とその先の生家を見つめて立つ銅像

その一生を砂防にささげた赤木氏は、亡くなる前年、豊岡名誉市民に推され、またその功績が認められて文化勲章を授与されました。「砂防の父」、「砂防の神様」と呼ばれた彼は、1972年、85歳で亡くなりました。引野の生家近くに「生誕の地」の石碑が、また塩津水防倉庫北側には、リュックサックに脚絆という独自のスタイルの銅像が建てられています。なお、出石川防災センター（いずし古代学習館）一角に功績をたたえる展示コーナーがあります。

▲出石川防災センター

※注…連合国軍最高司令官総司令部

設計ＯＪＴ（砂防堰堤概略設計）の取り組み
～ 計画から図面作成までのアナログ的アプローチ ～

兵庫県砂防課

１．概　要

当研修は、若手技術者を対象として、実際に手書きで設計図面を作成することで砂防堰堤の設計手法を理解するともに、今後事務所で取り組んでいく箇所の概略計画図面を作成することで、用地先行調査に利用するなどにより事業の推進に寄与することを目的としている。７月に１回目を開催、好評であったことから 11～12 月に２回目を開催した。

ＯＪＴとは、本来、職場での実務を通じて、経験豊富な職場の上司や先輩が、実際の業務を題材に若手社員や後輩に知識や技術を伝えることで業務知識を身につける育成手法である。この定義に基づけば、今回実施した研修は、厳密にはＯＪＴの定義には該当しないが、研修生の理解度を高めるため、指導方法としてＯＪＴの手法を取り入れていることから「設計ＯＪＴ」という名称を使用している。

当研修は、若手技術者の技術力向上を目指す「まちづくり技術センター」、砂防事業を推進する「砂防課」、手書き設計の経験豊富な「土木技術マイスター」（県 OB）の３者が協力し開催している。各々が担う役割は、「まちづくり技術センター」が会場の段取り等の事務処理・研修に使用する地形図の作成、「砂防課」が研修マニュアルやプログラムの作成・研修全般のコーディネイト、「土木技術マイスター」が研修生に対する実際の講師という分担である。

２．研修プログラム

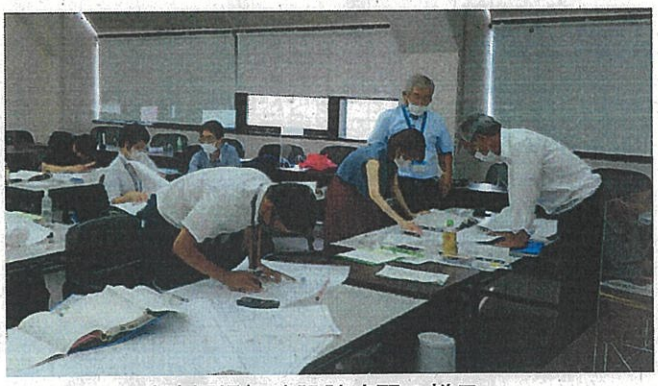
研修は、前期３日間と後期３日間としている。前期３日間では、砂防堰堤の設計の基本を理解するため、研修開催場所である但馬空港の近くに位置する詳細設計完了済みの箇所（現場は未着手）を題材（研修箇所）に、砂防課職員のコーディネイトに従い、「土木技術マイスター」の補助を仰ぎながら、計画図面を作成する。後期３日間では、研修生が所属する事務所で今後事業に取り組んでいく箇所を題材（計画箇所）に、前期３日間で会得した知識を再確認しながら、「土木技術マイスター」とともに、計画図面を作成する。このように研修期間中に、研修箇所と計画箇所の２種類の計画図面を手書き作図することにより、理解を深めることとしている。

なお、研修を前期と後期に分けているのは、その間に、「まちづくり技術センター」が既存の３次元データから後期に用いる地形図（前期に研修生が設計に必要だと判断した法線の縦断図・横断図等）を作成するためである。

具体的な研修プログラム（主なもの）は以下のとおりである。

・「砂防基本計画の策定」講義
・「砂防堰堤設計の留意点」講義
・現地調査（竣工箇所２箇所、研修箇所１箇所）
・図面作成範囲の設定（計画箇所）
・砂防堰堤概略設計演習（研修箇所・計画箇所）

※ 講義の講師は、砂防課職員



砂防堰堤概略設計演習の様子

３．おわりに

研修に参加した若手技術者からは、「手書きで図面を作成することで、設計手法がよく理解できた」「マンツーマンの指導は、疑問点もすぐ聞くことが出来たので非常に役に立った」等、非常に好評であった。もし、当研修に興味をもたれた若手技術者の方がおられましたら、来年度も開催する予定ですので、積極的な参加をお願いします。

最後になりましたが、当研修の開催にあたりお世話になりました「土木技術マイスター」の皆様、「まちづくり技術センター」の皆様とりわけ当研修の船出に深く関与して頂いた寺谷副理事長に感謝申し上げます。

令和３年７月31日(土)　神戸新聞　但馬版

ベテランの技術 次世代に

土木職の県若手職員ら 砂防えん堤テーマに研修

手書き設計の基礎など伝授

豊岡　土木職で採用された県若手職員らに、手書き設計などの技術を職員ＯＢらが指南する研修が、このほど豊岡市内で開かれた。土木現場でもデジタル化や設計の外部委託が進む中、現地調査や手書き設計の基礎などを身に付けてもらうのが狙い。全国初の試みといい、砂防えん堤をテーマに、設計や図面チェック、住民説明ができるノウハウを若手たちが学んだ。（阿部江利）

県職員ＯＢらに砂防えん堤の手書き設計図の書き方を教わる若手職員たち＝豊岡市岩井

研修は、県と県まちづくり技術センター（神戸市）が主催。専門知識や力量にたけた「ひょうご土木技術マイスター」を指導役に招いた。今月中旬から6日間の日程で、前半と後半に分け、県砂防課や但馬、丹波地域の4土木事務所の若手、中堅職員7人が参加した。

13日から始まった前半は、職員らが同市内の砂防えん堤や建設予定地に足を運び、建設地の見極め方や効率よく土砂を捉えられる地点の選び方といった基礎知識を学んだ。26日からの後半では、各職員が配属先で実際に予定されている砂防えん堤の設計図を手書きする作業にも挑戦し、ＯＢらがマンツーマンで手ほどきした。

参加した豊岡土木事務所の荒田直子さん(44)は「初めて教わることが多かった。難しい内容だったが実践的で必要なことばかり。さらに勉強して役に立てたい」と話す。マイスターの南則夫さん(71)は「砂防を知らない若い世代も多いが、安全確保のためにハード整備はおろそかにしてはいけない。職員が慣れることで、地元の人たちにも説明しやすくなるはず」と力を込める。

同センターは「6日間の研修で全てを理解するのは難しい。設計の基準を学んで職場に持ち帰り、チェックする目を養ったり、自ら勉強をするきっかけにしたりしてもらいたい」と期待する。